東京新聞　平成5年1月25日　夕刊

133年の眠りから"浮上"

機関技師も残していた

咸臨丸航海日記　復路をイラスト入りで

航海日記㊙と箱館戦争の絵巻物

安政七年（一八六〇年）勝海舟らとともに咸臨丸に乗り込み渡米した機関技師の航海日記とその後この技師が参加した箱館戦争の絵巻物が、このほど見つかった。この航海の日記として現存するのはいずれも航海士が残したもので、当時オランダから導入されたばかりの蒸気機関操縦技術を身につけた人物の日記が見つかったのは、初めて。絵巻物は機関技師の残した箱館戦争の記録「麦穀（そうこ）録」の付図とみられる。

筆者は、小杉雅之進（後に雅二）。長崎海軍伝習所の伝習生で、咸臨丸に機関科士官候補生として乗り込んでいた。帰国後、維新に際し、榎本武揚に従い五稜郭の戦いに参加し投獄。獄中、有名な「麦穀録」も著している。

小杉雅之進

日記と絵巻物は、小杉家に代々引き継がれ、ひ孫に当たる小杉伸一さん（ペンー横浜市在住）が保存していた。榎本武揚が設立した徳川幕府の育英校農業科の後継の現東京農業大学が今年、創立百周年を迎え、同大関係者が小杉家に榎本直筆の掛け軸を寄贈品として受け取りに行ったところ、小杉さんからこれらの史料が提示された。

日記には「サントウィス島（ハワイ諸島）より大日本相州浦賀港ならびに江戸まで」と題字が記されている。渡米の復路に記したようで、日付はサンフランシスコ出港翌日の五月九日から六月二十五日まで。途中立ち寄った、オアフ島ホノルルの人々の暮らしをイラスト入りで書き留めたものを付録のようにつけている。

日付は旧暦と西洋暦を併記。第一番から六番まで、毎日の当直番を追って、天気、温度、風向き、船の位置を記録している。小杉は機関方ではあったが、蒸気機関の操作に関する記述はほとんどない。

海軍歴史保存会理事で、「長崎海軍伝習所　十九世紀東西文化の接点」（中央公論社刊）の著者、藤井哲博さんは「海軍伝習所の目的は、オランダから蒸気軍艦の導入、乗組員の養成だった。小杉は二期生で、幕府が一からオランダ人の教育を受けさせようと選抜した若者の一人」という。

この航海の記録として残っているのは、航海長・小野友五郎、航海科士官候補生・赤松大三郎、機関の従者・長尾幸作がそれぞれ残した日記。

その理由を「蒸気機関の作業は当時、出入港のときだけ。石炭をあまり積めなかったから。残りは帆で進んだので、機関方としても記事がなく、デッキに出て運用方（帆の操作）、航海方（位置の計測）に聞き、日記の体裁を整えたのでは」と推測する。

また日記は復路のみで往路はない。「日記が残っていないのか、書いていないのか。往路はしけが多く、とても日記が書ける状況ではなかった」と藤井さんは推測する。

復路は比較的天候に恵まれ、船も揺れなかったようで、日記の文字が比較的整っているのも説明がつく。

「研究者としては、蒸気エンジンのことや筆者の主観がないのが残念。しかし機関方も日記を書いていた事実の発見に意義がある」と藤井さんは評価する。

日記と絵巻物のほかにも、小杉さんが描いたと思われる人物画や地形図、事務記録などもあり、東京農業大学が、図書館で史料として残す予定になっている。

咸臨丸　江戸幕府の発注でオランダが建造した軍艦。長さ四十九㍍、排水量六二五㌧、一〇〇馬力の蒸気機関を備えた。一八六〇年、遠米使節迎艦の護衛艦として勝海舟、木村喜毅らが乗り組み日本軍艦として初めて太平洋を横断、サンフランシスコに渡り、帰国した。

1993年（平成5年）1月25日夕刊